GM 鶴牧-3 環の会

第 7 回クラシックを楽しむ会

2014 年 1 月 26 日（日）18:30～21:30

タイトル：**歌劇「ラ・ボエーム」（プッチーニ）**
会場等　：サンフランシスコ歌劇場 1988 年 11 月
　　アメリカ、サンフランシスコ
楽団等　：サンフランシスコ歌劇場管弦楽団、同合唱団
　　サンフランシスコ少女合唱団、
　　サンフランシスコ少年合唱団
指揮　　：ティツィアーノ・セヴェリーニ指揮
演出等　：フランチェスカ・ザンベッロ演出
出演　　：ミレッラ・フレーニ　（ミミ：お針子）
　　ルチアーノ・パヴァロッティ（ロドルフォ：詩人）
　　ジーノ・キリコ（マルチェルロ：画家）
　　サンドラ・パチェッティ（ムゼッタ：歌手）
　　ニコライ・ギャウロフ（コルリーネ：哲学者）
　　スティーブン・ディクソン（ショナール：音楽家）

パリ、カルチェ・ラタン街、カフェ・モミュスの場面

左：フレーニ、右：パバロッティ

歌劇「ラ・ボエーム」あらすじ

1830 年頃のパリ、カルチェ・ラタン街が舞台。4 人の貧しい芸術家や哲学者の卵、極貧のお針子、歌手の青春の物語。

みどころ聴きどころ

第 1 幕でロドルフォがミミの手に触れて**「冷たい手を」**にミミが**「私の名はミミ」**と応える場面、第 2 幕でムゼッタが歌う**「私が一人で街を歩くとき（ムゼッタのワルツ）」**の場面は特に親しまれている。第 4 幕でコルリーネが**「古い外套よさらば」**を歌う場面は皆の優しさに涙を誘われる。

サンフランシスコ歌劇場

正式名は「戦勝記念オペラハウス」。1906 年に発生した M7.8 のサンフランシスコ大地震後の復興計画の中で向かいの市庁舎とともに同じ設計者により建設され 1832 年に竣工。

国連設立と国連憲章を採択した 1945 年の連合国会議、および日本国との平和条約を締結した 1951 年のサンフランシスコ講和会議はいずれも 50 か国が参加してこの歌劇場で開催。

客席は 3,146+200 席でメトロポリタン歌劇場、シカゴ・リリック歌劇場と並ぶ米国 3 大オペラハウスの一つ。サンフランシスコ・オペラとサンフランシスコ・バレエの本拠地。

第 8 回クラシックを楽しむ会（予告）

タイトル：**「ウィーン・フィル　ニューイヤーコンサート 2014」**
3 月 23 日（日）18 時開場、18 時 30 分上映開始
　音楽界の一大イベント。本物のウィンナー・ワルツをダニエル・バレンボイムの指揮で。
2 月はお休み、4 月以降歌劇だけでなくミュージカルも、お楽しみに

ルチアーノ・パバロッティ（1935-2007）、ミレッラ・フレーニ（1935-）

ロドルフォ役ルチアーノ・パバロッティ（バス）

イタリアのモデナ生まれ。同郷で同い歳の名ソプラノ歌手、ミレッラ・フレーニとは幼なじみの上、同じ乳母によって育てられた。

「神に祝福された声」、「キング・オブ・ハイ C」、「三大テノールの一人」、「パヴァロッティは楽譜が読めない」（当然パート譜は読めた！）、そして死の前年 2006 年トリノ五輪開会式で歌ったトゥーランドットの「誰も寝てはならぬ」は荒川静香の「イナバウアー」とともに有名。

死の 4 年前に 34 歳年下の元秘書と再婚し娘をもうけた。

ミミ役ミレッラ・フレーニ（ソプラノ）

左：若きフレーニ、右：夫ギャウロフと

イタリアのモデナ生まれ。母親がパバロッティの母親と職場の同僚だったことから同じ乳母によって育てられ幼なじみだった。

1960 年前後にイギリスのグラインドボーン音楽祭に出演して世界的に知られる。カラヤンとはミラノ・スカラ座、メトロポリタン歌劇場でミミ役を歌うなど多数共演。なお伊、仏から勲章授与。

戦後最高のバス歌手の一人、ニコライ・ギャウロフ（1929-2004）と再婚してしばしば共演、今回もコルリーネ役で出演している。

指揮と舞台

指揮者ティツィアーノ・セヴェリーニ

1955 年ローマ生まれ。ミラノスカラ座、ウィーン国立歌劇場に続いて本公演のサンフランシスコ歌劇場で指揮、本公演の録画は名盤。欧米で活躍中。

演出家フランチェスカ・ザンベッロ

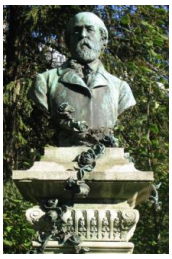
1956 年ニューヨーク生まれの女性演出家、芸術監督、映画監督。メトロポリタン歌劇場、英国ロイヤル・オペラ・ハウス（王立歌劇場）など欧米で活躍中。フランスの文化勲章をはじめ、欧米各国および日本から受賞多数。

舞台設定と衣装

ラ・ボエームの台本は 1830 年頃（原作は 1840 年代）であるが、本演出の時代設定はラ・ボエーム初演当時の 19 世紀末。なお、フレーニが演じるミミとカルティエ・ラタンの少年、少女の衣装はメトロポリタン歌劇場、その他はサンフランシスコ歌劇場で制作。

歌劇「ラ・ボエーム」誕生の経緯

原作者アンリ・ミュルジェール(1822-1861)



パリに生まれ同じ境遇の若い芸術家達と交流を深めた。実体験による短編集をまとめた戯曲「ボエームの生活情景」が（フランス 2 月革命の翌年）1849 年にパリ・ヴァリエテ座で上演されて評判になる。1851 年には小説として出版された。パリのリュクサンブール公園に彼の胸像が建てられている。

※ボエームとはボヘミアンのこと。ロマがボヘミア地方からフランスに流入したことから名づけられ、後に定職を持たない芸術家や作家、自由奔放な生活者を指す言葉に変化した。

台本と初演

左：プッチーニ、右：トスカニーニ

台本はジュゼッペ・ジャコーザとルイージ・イッリカのコンビ。プッチーニが台本に厳しく注文を付けたため作業は難航。完成した台本と曲は原作の雰囲気をよく伝えている。特にミミの死の場面は作曲者自身が感動。

初演は 1896 年トリノ・レージョ劇場。このときプッチーニは 38 歳で指揮者に 28 歳のアルトゥーロ・トスカニーニを起用。

あらすじ

【時と場所】

1830 年頃のクリスマス・イブから翌年春まで。パリのカルチェ・ラタンと 2km 南のアンフェール門。（原作では 1840 年代である。）

【登場人物】

ミミ（ソプラノ）：女主人公。貧しいお針子
ロドルフォ（テノール）：主人公。詩人を志す若者
マルチェルロ（バリトン）：ロドルフォの親友。画家
ショナール（バリトン）：ロドルフォの親友。音楽家
コルリーネ（バス or バスバリトン）：ロドルフォの親友。哲学者
ムゼッタ（ソプラノ）：マルチェルロの恋人。歌手

【第 1 幕】カルチェ・ラタンの屋根裏部屋、クリスマス・イブ

詩人のロドルフォ、音楽家のショナール、画家のマルチェルロ、哲学者のコリーネは貧しいながらもパリの屋根裏部屋で一緒に暮している。ストーブを燃やす金もなくなった中、ショナールが稼いできたお金でクリスマス・イブの祝いにカルチェ・ラタン街へ出かけることにする。

3 人の仲間を先に送り出した詩人ロドルフォのもとに隣人のお針子ミミが灯りの火を借りに来る。互いに一目ぼれ、仲間たちのいる街へ出掛ける。

冷たい手を（ロドルフォ）
私の名はミミ（ミミ）

【第 2 幕】カルチェ・ラタン街、カフェ・モミュス

街はクリスマス・イブの賑わい。カフェ・モミュスに先着していた仲間の所へロドルフォとミミがやってくる。ロドルフォは仲間にミミを紹介する。そこに、マルチェルロの元恋人ムゼッタが金持ちのアルチンドロと一緒に入ってきて、嫉妬と駆け引き。ムゼッタは靴が合わないと言って騒ぎ、アルチンドロに靴を買いに行かせる。その間に彼女はマルチェルロとよりを戻す。カフェの飲食代をアルチンドロのツケにし、仲間たちと去る。

私が一人で街を歩くとき（ムゼッタのワルツ）

【第 3 幕】アンフェール門（地獄門）左の居酒屋、2 月末雪の夜明け前

翌年の 2 月末、マルチェルロはムゼッタとともに居酒屋に住み込んで働いている。マルチェルロは看板を描き、ムゼッタは歌う。

ミミがマルチェルロを探して居酒屋にやってくる。ミミはマルチェルロに、ロドルフォが嫉妬深く冷たいので破局寸前だと相談する。その時、居酒屋からロドルフォが出てきてミミは隠れる。ロドルフォはマルチェルロに本心を打ち明ける。実はミミを深く愛していながらも、彼女は不治の病で貧乏な自分にはかえって彼女の病を重くしているという。聞いていたミミはロドルフォに別れを告げる。

ムゼッタが居酒屋の客と騒いでいるのを見て、マルチェルロもムゼッタとケンカ別れする。

二組の恋人達が歌う二重唱、三重唱、四重唱

【第 4 幕】第 1 幕と同じ屋根裏部屋

ミミとムゼッタは彼らと別れたあと、それぞれ金持ちのパトロンの元で暮していた。

ロドルフォとマルチェルロはそれぞれ別れた恋人のことを思い出し仕事が手につかない。そこにムゼッタがロドルフォに一目会いたいという瀕死のミミを連れてやってくる。ロドルフォとミミ、マルチェルロとムゼッタはそれぞれヨリを戻す。仲間たちは自分の持ち物を売りミミの薬代にあてようとする。ミミは仲間たちに囲まれながら永遠の眠りにつく。

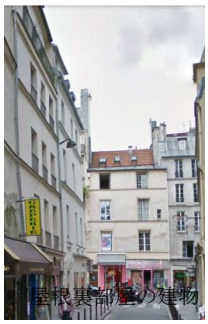
古い外套よさらば（コルリーネ）

参考

【1830 年頃の時代背景】

復古王政を打倒した 1830 年のフランス 7 月革命はヨーロッパ各国の革命運動に影響を与えた。右図は 7 月革命の市街戦を題材にしたドラクロアの「民衆を導く自由（の女神）」（ルーブル美術館）。この他、ビクトル・ユゴーの「レ・ミゼラブル」、アンデルセン「絵のない絵本」の第 5 夜、ショパン「革命のエチュード」、ベルリオーズ「葬送と勝利の大交響曲」などの誕生に影響。

【カルチェ・ラタン、カフェ・モミュスと当時のアパルトマン】



カルチェ・ラタン（ラテン地区）はセーヌ川左岸 5 区、6 区にまたがる地域。ソルボンヌ大学（パリ第 4 大学）の神学生達ラテン語を話す教養のある学生が集まる街として誕生。芸術家が集う。

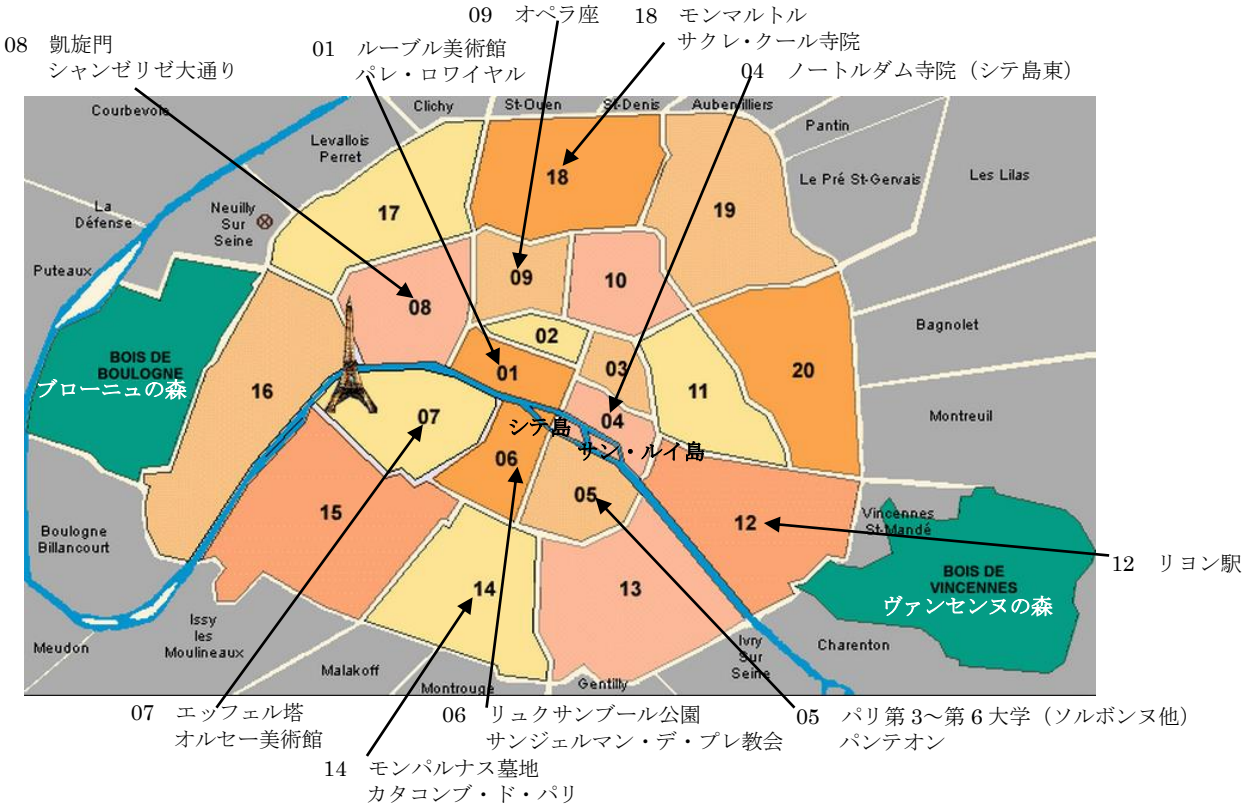
歌劇の舞台のアパルトマン（写真の左建物）はリュクサンブール宮殿（現在の元老院）とサンジェルマン大通りの間の裏通り。

カフェ・モミュス（絵の右建物）はカルチェ・ラタンではなく、ヌフ橋を渡ったセーヌ川右岸 1 区のルーブル美術館東正面近くに実在し芸術家達が集まった。現在はクリニックとホテル入口。台本上の店の位置はヌフ橋に向かう途中の Buci 交差点角の Café le Buci らしい。

一般的なアパルトマン形式の建物は 1 階が商店と門番部屋で 2 階は裕福な家主の邸宅。3 階から上が賃貸アパートで屋根裏部屋は学生向け安アパート。建物の真中は吹き抜けの階段室。当時はまだ電気もガス※もなくロウソクの光がなければ建物の中は真っ暗だった。※1832 年オペラ座がガス灯を導入した。

【アンフェール門（地獄門）】

カルチェ・ラタンの南 2km の 14 区、現在のダンフェール・ロシュロー駅付近の城門で 1787 年に造られた。この地下はカタコンブ・ド・パリ（採石場跡の納骨堂、600 万体）。写真の左にモンパルナス墓地、右に駅舎がある。オルレアン街道はこの門が起点。

当時、税関詰所間に門柱と鉄柵があった。正面がカルチェ・ラタン方向

パリ行政区（01 区から時計回りらせん状に 20 区まで）